



Title	フランクフルト学派と反ユダヤ主義 -ホルクハイマーとアドルノの場合-
Author(s)	園田, 尚弘
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学篇. 1990, 31(1), p.77-88
Issue Date	1990-07
URL	http://hdl.handle.net/10069/15273
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-20T22:57:39Z

フランクフルト学派と反ユダヤ主義

— ホルクハイマーとアドルノの場合 —

園 田 尚 弘

Die Frankfurter Schule und der Antisemitismus

— Die Antisemitismus - Analyse von Horkheimer und Adorno —

Naohiro SONODA

決定的であるのは次のことである。人間がユダヤ人に対する不正だけでなく、不正一般に感じやすくなること、ユダヤ人迫害だけでなく、迫害そのものに感じやすくなること、そしてある個人が、たとえそれが誰であれ、理性的存在として尊重されないときは、人間のなかにある何かが憤激するということが、これが決定的である。

— ホルクハイマー —

はじめに

反ユダヤ主義について書かれた著書、論文は枚挙にいとまない。それらのなかで、ホルクハイマーとアドルノの反ユダヤ主義がどのような位置を占めるかという問題は、にわかには究明し難い。しかし本稿で主としてとりあげられる二冊の書物が、現代思想のなかできわめて重要な著作であることは、なにびとも否定しえないだろう。『啓蒙の弁証法』と『権威主義的パーソナリティ』がそれである。

二冊とも直接反ユダヤ主義にとりくんだ書物ではない。しかし反ユダヤ主義の問題は、これらの書物のなかできわめて重要な主題のひとつである。それゆえ本稿では、『啓蒙の弁証法』のなかの一篇の論文『反ユダヤ主義の諸要素』とアドルノが参加した共同研究、『権威主義的パーソナリティ』、さらにホルクハイマーの若干の論文をとりあげ、それらの著作にみられる反ユダヤ主義分析に

ついて考えてみたい。

I. ホルクハイマーの『ユダヤ人とヨーロッパ』について

論文の末尾に執筆年月日が入ったホルクハイマーの一論文『ユダヤ人とヨーロッパ』における彼の立場について検討してみたい。日付けは1939年9月1日とある。いうまでもなく第二次世界戦争開始の日付けである。この論文におけるホルクハイマーの立場はわりに単純である。反ユダヤ主義はファシズムに伴われるものであり、またファシズムは十九世紀自由主義の帰結であるというのである。だからこの論文の約三分の二は自由主義とファシズムの議論にさかれ、直接に反ユダヤ主義を論じているのは最後の三分の一にすぎない。

ホルクハイマーにとって当時のヨーロッパは、プロレタリア世界革命の展望がとざされ、有効性のないさまざまの文化価値がもちだされてくる世界であった。諸国家は急速に全体主義的国家へと変貌をとげた。一方では、ドイツ流の全体主義への変貌ではなく、もっと穏健なたちで資本主義を改革してゆこうとする動きもあったが、ホルクハイマーはそうした方向性にも希望を見出していない。

原理的に自由主義がファシズムに連続しているとみるホルクハイマーにとって、自由主義の再生にはチャンスがない、かえって全体主義的秩序は、長期にわたって経済的チャンスをもっている。「各国民が自己の所有する知識や機構が権力と不正の永遠化ではなく、自らの幸福に役立たねばならないと理解しないかぎり、ファシズムは生きのびることができる。」¹しかしファシズムの安定は民衆の従属ということを前提としている。またある程度失業状態が改善されても「ファシズムにおいては、生産諸力は以前よりも強く抑えつけられている。」²こうした意味で、ホルクハイマーはファシズムへの懐疑の念は当のドイツ人の胸にもきざしているとみる。

しかしいずれにしろ、ホルクハイマーにとってファシズムは、競争原理を極端におし進めた末の体制と考えられている。そうした意味では、当時の状況は不安定であり、現在、全体主義的秩序をとっていない国においてもそうした方向にむかう可能性が残されていると考えられた。

反ユダヤ主義の前提をなすと考えられるファシズムと自由主義についてこのように論じたあとで、ホルクハイマーは、迫害と敵視をうけるユダヤ人の状態とユダヤ人の任務について考察を進める。

彼はユダヤ人が規制をうけている側面を、生業とブルジョア民主主義の面に

わたって分析する。

まず生業の面而言えば、ファシズム経済というものが、流通過程を制限するシステムであることから考えても、長期にわたって流通過程にしがみついて生きてきたユダヤ商人に機会がないのは、容易にみてとれることである。

ユダヤ人が直面する政治的状況はどうか。ナチズムがうみだした亡命ユダヤ人は亡命先で過酷な状況に直面する。先住のユダヤ人からは疎まれ、下層の人間の憎悪や怒りを、彼らは身にひきうける。ホルクハイマーは、亡命ユダヤ人がたどりついたさまざまの国の民衆のなかにある弱者や隷属者に対する秘かな憎しみを予想している。こうした困難な状況を打開するためにユダヤ人たちは過去や来るべき未来に望みを託している。

たとえば十九世紀の自由主義を想起するひとびとがいる。しかしファシズムを自由主義の延長上に指定するホルクハイマーの目に、それが無意味であることは明らかである。

また第二次世界戦争に希望を託するユダヤ人がいる。しかしその希望もむなしい。なぜなら、「世界戦争がいかなるかたちで終わろうとも、完全な軍事化が世界を権威主義的、集団主義的生活様式へと追いこんでゆく」³ からである。

結局のところ、ホルクハイマーにとっては、ユダヤ人が人間として生きることが可能になるときは、「人間が人類の前史を終焉せしめたとき」⁴ である。これはマルクスの答えでもあった。だからといってドイツの労働者に革命を促すアジテーションをやればよいということにはならない。ホルクハイマーは自らのユダヤ人としての伝統を想起しながら、彼の当面の態度を次のような言葉で表明する。

「ユダヤ人たちはかつて抽象的一神教や偶像崇拜の拒否、有限なるものを無限なるものにすることへの拒絶を誇りにしていた。彼らの苦難はこんにちそれらのことを指し示している。自らを神にまつりあげている現に存在するものへ尊敬を払わないこと、それが軍靴のヨーロッパにおいて、よりよいものへの準備におのが生を向けるものの宗教である。」⁵

この論文におけるホルクハイマーの反ユダヤ主義分析は、最初に指摘したように、反ユダヤ主義をもたらすものとしての全体主義、ファシズムにメスがふるわれ、反ユダヤ主義も政治的側面からとらえられている。その拠って立つ立場はマルクスにきわめて近い。さらにファシズムをうみだす自由主義とそれをたてまえとしているヨーロッパ諸国民の隠れた反ユダヤ主義への鋭い指摘がある一方で、ユダヤ人迫害を嫌悪の念をもって傍観するドイツ労働者の叙述が注

意をひく。

II. 『反ユダヤ主義の諸要素』

『ユダヤ人とヨーロッパ』に比すると、次にとりあげる『反ユダヤ主義の諸要素』における反ユダヤ主義の分析はきわめて多面的である。

前述したようにこの論文が含まれる『啓蒙の弁証法』はホルクハイマーとアドルノの共著であり、彼らのアメリカ合衆国亡命時の産物である。この本は第二次世界戦争中、ファシズムの敗北が見てとれる時期に書かれ、1947年にアムステルダムで出版された。

すでに長くナチスの蛮行を目のあたりにしてきた著者たちにとって迫害されるユダヤ人の運命が大きな問題になったことは想像に難くない。そして史上にその例をみないユダヤ人虐殺に走ったナチズムの人種差別主義の本質と由来を解明することが急務のひとつであったろうことも容易に想像できる。そしてそれはこうした野蛮をうみだした文明そのものへの懐疑となり、壮大な歴史哲学的広がりをもった構想となった。たんに本稿で扱う一論文だけではなく、本全体を構想するにあたって著者たちの念頭にどのような思いが去来していたかを示す文章が本書の序文にある。「じつのところわれわれが胸に抱いていたのは、ほかでもない。何故に人類は、真に人間的な状態に踏み入ってゆくかわりに、一種の新しい野蛮状態に落ちこんでゆくのかという認識であった。」⁶ こうした意味で著者たちの目標はいわば反ユダヤ主義の哲学的原史を叙述することであった。つまりそれは人類の野蛮への転落がけっして特定の局面においてだけ出てくるようなものではなく、もともと最初から合理性のなかにそれが含まれていることを示すということだった。彼らは「反ユダヤ主義の非合理性は支配する理性の本質自身とその像に対応する世界から導きだされる。」⁷ といいきっている。

次にこの論文を少し立ち入って検討してゆくことにする。

著者たちはまず代表的ユダヤ人観の検討からはじめている。国粹主義的反ユダヤ主義と自由主義的ユダヤ人観の真と偽が論じられる。世界の幸福がユダヤ人の撲滅にかかっているなどという前者の妄想が真実でないことはいうまでもないが、ファシズムがその妄想を実行したという意味ではそれは真実である。これに反してリベラルなユダヤ人観は、民族や人種によってユダヤ人が他と区別されることはなく、宗教と伝統によって区別されるだけだというのだが、これはイデオとして正しくとも、人間の統一がすでに達成されていると考える

点でまちがっている。自由主義者たちは反ユダヤ主義は社会秩序をゆがめるといすが、本当は、社会秩序は人間をゆがめることなしに存続することができないのである。著者たちは反ユダヤ主義もこのような人間を歪めて存続する社会秩序からひき離すことができないと主張し、その秩序の本質を暴力に求めている。

それでは反ユダヤ主義が実際行なっているところは何であろうか、著者たちは民衆運動のレベルでの反ユダヤ主義の検討を試みる。反ユダヤ主義者たちは、財産のアーリア化などと称してユダヤ人たちに襲いかかり、その財産を没収する。それは、反ユダヤ主義者たちが、社会民主主義は悪平等をめざしていると非難するところを自ら実践していることになる。ユダヤ人の財産を横領しても反ユダヤ主義者たちの懐は決して豊かにはならない、しかしそのような明白な事実を指摘しても、ユダヤ人襲撃がやまないことからみても、反ユダヤ主義が民衆にとっての贅沢であることが理解される。ホルクハイマー達はこうした意味でユダヤ人殺しの儀式は、抑圧され、退屈した民衆の気ばらしなのであり、そしてそれは社会的にみれば支配の側にとってはひとつの安全弁であるとみなしている。

反ユダヤ主義の経済的側面からの考察も欠かせない。現在の社会のように商売がそのまま政治であるようなブルジョア社会においては、反ユダヤ主義は特に経済的な原因をもっている。ローマ時代以来、遅れた文明の状態にあったヨーロッパの民衆にとって、ユダヤ人は一種の文明化された植民者の役割を果たしてきた。王侯の保護の下で仲介者の役割に限定されて暮らしてきたユダヤ人は、その意味で、田舎の手工業者や農民にとっての目のうえのこぶであった。しかしユダヤ人にとって商売というのは自ら選んだ職業ではなく、それは運命であった。そのようなユダヤ人が今や時代遅れとして近代社会では目ざわりな存在となる。生産が優位を占め、生産手段の所有者が優位を占める社会では、搾取する者の代表としてユダヤ人が名指しされるのである、彼らはこうした意味で犠牲の羊なのである。自ら創造者を気どるが、しかし搾取と手を切れないブルジョアが抱く反ユダヤ主義はその意味で「自己憎悪であり、寄生者のやましい良心なのである。」⁸

著者たちは反ユダヤ主義を宗教的側面からも追求している。一般に、今日では、ユダヤ教とキリスト教という宗教上の対立からくる反ユダヤ主義は民衆を動かす力がないので、宗教上の理由からくる反ユダヤ主義はないのだと言われる。研究者のなかには、ホルクハイマーとアドルノも宗教上の理由からの反ユ

ダヤ主義を否認していると主張するものがあるが、実際は著者たちは宗教上の反ユダヤ主義はなくなっているのではなく、たんに目に見えなくなっているにすぎないと考えている。「二千年の長きにわたってユダヤ人迫害に駆りたててきた宗教上の敵対がまったくなくなるというのは難しいのである。」⁹

宗教レヴェルからの反ユダヤ主義の起源を著者たちは、信仰と救済が必ずしも必然的とはいえないキリスト教の教義の暗黙の合理化にあるとみる。愛の宗教としてキリストの犠牲死を手本にするように促がされるキリスト教徒は、しかしそうすることによって自らの「自然」を破壊してしまう。しかもそうした信仰の道徳は必ずしも自己の救済を約束しない。これはキリスト教におけるユダヤ教的、否定的契機であり、一般のキリスト教徒は暗黙のうちにその契機を退けているのである。こうしてキリスト教を「確実な所有」⁹だと自己偽瞞をするものにとっては、自己と反対の道をとるもの一つまりユダヤ人—がこの世で不幸になることで自らの真が明らかにされることになる。反ユダヤ主義の起源にはこうした面がある。しかし啓蒙が進んだ現在の社会で宗教的次元からの反ユダヤ主義は稀にしかみられない。著者たちによれば、宗教的問題は今では文化財として組みこまれてしまっているが、だからといって完全に止揚されてはいないのである。

著者たちは反ユダヤ主義が反ユダヤ主義のモチーフとしてあげる病的憎悪（Idiosynkrasie）について論じている。これは人間が文明化、啓蒙の過程で抑圧してきたシメーシスの態度と関わりがあるが、ミメーシスの態度とは反対の方向を向いている。ホルクハイマー達は反ユダヤ主義者を枠づけている心理的エネルギーは合理化された病的憎悪である、とみなし、この病的憎悪を概念に高め、その無意味さを悟ることが、社会を反ユダヤ主義から解放するためには、必要なことと考えている。

アドルノとホルクハイマーは反ユダヤ主義の心理的側面をも分析しているが、その際彼らはことに投射とパラノイドという心理学的概念を応用して反ユダヤ主義の心理的メカニズムを分析した。二人は反ユダヤ主義はまちがった投射に基づいていると定義する。知覚そのものが本来投射なのであるが、コントロールされた投射と誤った投射があるのである。誤った投射は自らの内面を外部の敵に投影する。ユダヤ人の現状にはかかわりなく、支配によって抑圧されたものの暗黙の憧憬を写した権力なき幸福、労働なき報酬、限界のない故郷、神話なき宗教というユダヤ人に与えられるイメージはやはり病んだ投影によって行なわれるのである。それゆえにホルクハイマーとアドルノは「支配からの個人

的、社会的解放はまちがった投射への抵抗運動である。」¹⁰ というのである。

後述する反ユダヤ主義に関する経験的調査でも言及されるが、極端な反ユダヤ主義はパラノイドの理論という概念によって理解されるだろう。パラノイカー（偏執病者）というのは、すべてを自己に従って創りあげる人間である。パラノイカーの抱く像は基本的に妄想であるから「知の影」¹¹ と呼ばれる。真の知はこれに対して誤った投射とコントロールされたそれとを区別する能力である。パラノイドはさまざまな二分法に耐えることができず、全てのものを自らの尺度で一元化してしまう。パラノイドは自らの自律を犠牲にして調和を達成する。ホルクハイマーとアドルノはパラノイドの特徴を個人を超えた集団におし進めて、反ユダヤ主義の客観的精神について語った。「反ユダヤ主義というような集団的投射が個人的投射にとってかわり、その結果、なまはんかな知識をもったものの知的体系が客観的精神となった。そしてついにファシズムで自律的自我は集団的投射の支配によって完全に破壊された。パラノイドの妄想システムのもつ全体性は、ファシズム社会の全体主義に対応するものだった。」¹²

さて第二次世界戦争後、ホルクハイマーとアドルノは『反ユダヤ主義の諸要素』の末尾にナチス敗北後の反ユダヤ主義に関するテーゼを付加する。そこでは「もはや反ユダヤ主義者はいない。」¹³ と書きはじめられ、反ユダヤ主義を独立した一項としてとりあげる意向を示していない。彼らによれば、問題なのは、ファシストの候補名簿の是認であり、大企業の決まり文句への無批判な同意である。

反ユダヤ的決まり文句（Ticket）があってはじめて反ユダヤ主義というものがあるのではなく、紋切り型思考が反ユダヤ的なのである。著者たちは潜在化した反ユダヤ主義の傾向を指摘しているのである。それは自ら判断する努力を喪失し、それとともに真と偽のあいだの区別もなくなってしまった時代への厳しい警告である。著者たちによれば、紋切り型思考には、個性、差異といった自らを他者と分つところのものに対する激しい怒りがこびりついている。その差異に向けられた怒りとは自然を支配する支配された主体のルサンチマンである。とすれば、迫害、偏見の原因となる紋切り型思考を克服する道は、たんなる啓蒙をこえた啓蒙と自然の困難な和解に求められるだろう。

Ⅲ. 『権威主義的パーソナリティ』における反ユダヤ主義分析

ホルクハイマーとアドルノは反ユダヤ主義をうみだす社会的客観精神について語る一方、他方ではアメリカ合衆国の国民を調査の対象に、広範な『偏見の

研究』に、ホルクハイマーは計画全体の責任者として、アドルノは計画の実践者の一人として参画している。調査は合衆国の研究者達と協同で実施された経験的調査であった。アドルノが直接携わった研究成果は、『権威主義的パーソナリティ』と題されて、1950年に出版された。アドルノはこの研究成果の全五部二十三章のうち、主として第四部「イデオロギーの質的研究」の第十六、十七、十八章を執筆している。このうちの第十六章「インタヴュー資料の偏見」の章はもっぱら反ユダヤ主義の問題にあてられている。フランクフルト学派を代表する二人の学者の社会思想史的視点からの反ユダヤ主義分析を追跡した後、被験者の主観的側面における反ユダヤ主義に焦点をあてたアドルノの分析を追求してゆくことは、アドルノの立論を総合的に見てゆくためにぜひ必要な課題であろう。無論、『偏見の研究』の対象は「潜在的にファシスト的個人、つまり反民主主義的な宣伝にとくに動かされやすい精神構造をもっている個人に向けられていた」¹⁴ ので、反ユダヤ主義も全体的コンテクストと切り離しては論じられないが、研究がそもそも反ユダヤ主義に注目することからはじまったことからわかるように反ユダヤ主義は偏見の重要な部分を占めていた。調査ではファシズム、少数民族差別、政治的経済的保守主義、それに反ユダヤ主義の部門を設けて、それぞれに関する質問表を合衆国西部のさまざまなグループから成る被験者に配布、回収してその得点を記録することから始められている。アドルノはその反ユダヤ主義の項の調査表によって集められた被験者の面接資料から反ユダヤ主義について追求しているわけである。

調査表で高得点を得た者の面接記録から特に明らかになったことは、ユダヤ人という客観的対象と偏見をもつものの判断とが一致しないということである。つまり反ユダヤ主義は対象であるユダヤ人の本性に基づくというよりはむしろ反ユダヤ主義者自身の心理的欲求や必要性に基づいているということである。それゆえに反ユダヤ主義は「機能的性格」¹⁵ をもっている。それは対象の特別な性質に拠らないだけにその偏見は容易に他の対象に変更され得るのである。

反ユダヤ主義者は現実と合致しないステレオタイプにしがみついている。それは反ユダヤ主義者にとってはステレオタイプのほうが自己の心理的欲求にとっては好都合であるからだ。経験というものがこうしたステレオタイプを修正してくれそうなものだが、反ユダヤ主義者の場合は、経験そのものが、すでにステレオタイプにいかれてしまっている。だから反ユダヤ主義者のステレオタイプを経験によって矯正することはできないのである。この種のステレオタイプのうちでアドルノがとりあげているのは次の三つである。ユダヤ人は問題であ

ること、ユダヤ人はみんな似ているということ、さらにユダヤ人は例外なくユダヤ人だと認められるということである。このようなステレオタイプをアドルノは反ユダヤ主義者の「パラノイアの理論」¹⁶と結びつけている。極端に偏見の強い人間はいわば心理的全体主義とも呼ぶべき心的傾向をもっていて、それはあたかも全体主義国家のミニチュアである。そこでは「すべてのものが硬直的に考えられ仮定された所属グループの自我理想に等しくなければならないのである。」¹⁷

社会学的にみれば、ユダヤ人の存在はプロレタリアと中流階級双方から白眼視される。プロレタリアの反ユダヤ主義者にとってはユダヤ人はブルジョア階級に属していて、中流の人間の経済的領域の代理人とみなされる。しかし一方で中流の反ユダヤ主義者にとっては、ユダヤ人はプロレタリアにとってのそれと同じではない。彼らはユダヤ人自身が経験する経済生活の基盤の危機を同じように経験している。ユダヤ人は彼らにとっては、「生意気にもまともな市民や実業家を装っている行商人」¹⁸である。しかしこのプロレタリアと中流の反ユダヤ主義者とちのユダヤ人の階級観のあいだのちがいを過大視してはならないだろう。いずれにしても彼ら双方にとってユダヤ人は「なりそこないのブルジョア」¹⁹なのである。

面接資料を分析してアドルノは、特に反ユダヤ主義について論じた第十四章の結論として次のような事実を強調する。一般に反ユダヤ主義は反民主主義の先鋒といわれるが、たしかに反ユダヤ主義と反民主主義感情にはつながりがあるということ。反ユダヤ主義の得点が高いものは、たとえ表面的に民主主義を唱えてもその言葉の背後に反デモクラシーの傾向を推定できる。反ユダヤ主義は不可避的に反デモクラシーにつながるのである。

反ユダヤ主義を含めてさまざまな偏見について『権威主義的パーソナリティ』は語っているが、それではそれらの偏見に対してどのような対策をとったらよいかを考えられねばならない。この本の結論において筆者たちは次のように提案している。「偏見に対抗するプログラムを規定し、策定するのは、われわれの仕事の一部ではないけれども、われわれの研究の一般的な含意について一定の論評をしておくことは許されよう。われわれの発見から直接出てくることは、とるべき対抗手段は偏見をもった視野の全体的な構造を考慮すべきであるということである。主要な力点は、特定の少数民族集団に対する差別におかれるべきではなく、ステレオタイプ、情緒的な冷たさ、権力との同一化、一般的な破壊性といった現象におかれるべきである。」²⁰ここでは偏見と結びついた権威主

義的パーソナリティこそがより重大な問題であることが語られている。それに抗する手段として教育の役割が重視されるのは当然だろう。『偏見の研究』の編集者の一人であったホルクハイマーが研究の目的について次のように述べている。「われわれの意図は、偏見を記述することにとどまるのではなく、まさにそれを根絶する一助となるようにそれを分析することにあるのだ。」²¹「根絶とは再教育を意味するのであり、科学的に達成された理解を根拠として科学的に計画される。」²² そうした教育の内容とは、『権威主義的パーソナリティ』の結論で提起された「子供が愛につつまれて一個の人間として扱われる」²³ 教育という言葉で表されるのであろう。

おわりに

以上、主として『啓蒙の弁証法』中の一編の『反ユダヤ主義の諸要素』と『権威主義的パーソナリティ』中の一章をめぐって、ホルクハイマーとアドルノの分析を見てきたが、これらの著述のあいだに、私たちが看過することのできない一点が残るように思われる。それはこれら二著のあいだの反ユダヤ主義に対抗する姿勢である。もちろん分析対象に関する観察視点のちがいもある。『反ユダヤ主義の諸要素』では反ユダヤ主義をとりまく客観的側面が論じられ、『権威主義的パーソナリティ』では問題の主観的、心理的側面が観察されている。しかし両者の差異は、後者の研究においては前者の社会的現実の分析が抑圧されていることに起因している。それがアドルノ達、ドイツからの亡命者達のアメリカ合衆国での微妙な政治的立場への思惑からきたものであろうことは推測される。いずれにしても両者に示された分析の姿勢は調和させ難い。私たちとしては、『啓蒙の弁証法』が極度に厳しい政治的季節のなかで執筆され、そのことが著書の基調にも黒い影を落としていることを指摘して、偏見をなくしてゆく教育の有効性を期待しておこう。その場合、前述した「子供が愛につつまれ、一個の人間として扱われる」教育が一般的にすぎるとすれば、もっと反ユダヤ主義に即した教育の内容が考えられねばならない。それを考える意味で、ホルクハイマーが1961年に行なった講演、『ドイツ系ユダヤ人について』に言及しておきたい。

彼はこの講演の最後において、反ユダヤ主義に抗するための教育を力説する。若い世代が歴史を知らない、ナチスによるユダヤ人の迫害の事実も若い世代のあいだでは忘れられているといった指摘に対して、歴史を学ぶことの重要性をホルクハイマーは否定しない。しかし彼がもっと強調するのは、不幸を可能に

する力や方法に抗する感受性を育てるということである。彼はユダヤ人の詩人の作品やユダヤ人の作曲家の作品を真実だと感じた人間は反ユダヤ主義に感染しないだろうし、真剣にユダヤの事柄にとりくんだ人間は決してあやまった宣伝にひきまわされることがないだろうと述べる。

そして教育の課題を、ユダヤ人に対する不正だけではなく、不正一般に対して、ユダヤ人迫害に対してだけではなく、迫害そのものに対して感じやすくなるようになることにおいている。「それが誰であれ、個人が理性的存在としてみなされないときには、人間のなかにある何かが憤激するということが決定的である。」²⁴ このように、ホルクハイマーはその講演をしめくくっている。ここにはナチスによる大量のユダヤ人虐殺、さらにはきわめて長期にわたるユダヤ人迫害の歴史をみすえたうえで、社会に巣食うさまざまな不正、迫害を克服してゆこうとする講演者のきわめて高邁な姿勢が窺える。

註

1. Horkheimer: Die Juden und Europa, S. 122.
2. Ebd. S. 128.
3. Ebd. S. 132.
4. Ebd. S. 133.
5. Ebd. S. 136.
6. Horkheimer und Adorno: Dialektik der Aufklärung, S. 1. (徳永訳)
7. Ebd. S. 6.
8. Ebd. S. 157.
9. Ebd. S. 160.
10. Ebd. S. 179.
11. Ebd. S. 175.
12. ジェイ、弁証法的想像力(荒川訳) S. 337
13. Dialektik der Aufklärung, S. 179
14. Adorno: Soziologische Schriften II. S. 150.
15. Ebd. S. 270ff.
16. Ebd. S. 302.
17. Ebd.
18. Ebd. S. 311.
19. Ebd. S. 309.

20. 邦訳 . 495 頁
21. 同上 . 9 頁
22. 同上 . 9 頁
23. 同上 . 498 頁
24. Über die deutschen Juden S. 315f.

書誌

テキストとしては

- Horkheimer und Adorno: Elemente des Antisemitismus, in: Dialektik der Aufklärung. (Fischer Taschenbuch Vlg)
- Adorno u. a.: The Authoritarian Personality in: Adorno Schriften 9.1. Frankfurt a. M. 1975.
- Horkheimer: Über die deutschen Juden in: Zur kritik der instrumentellen Vernunft (FAT4031)
- : Die Juden und Europa in: Z. f. S. Jahrgang 8. (dtv. reprint)

その他の参考文献

- ・ Habermas: Der Philosophische Diskurs der Moderne, Frankfurt a. M. 1986
- ・ M. ジェイ、弁証法的想像力 みすず書房
- ・ 現代社会学体系第十二巻、アドルノ 青木書店
- ・ ホルクハイマー、アドルノ、啓蒙の弁証法 岩波書店

(1990年4月26日 受理)